

# 読売 俳壇

## 矢島 渚男 選

クロールの息つき習ふ青畳

茅ヶ崎市 原田 博之

【評】水泳の難関の息継ぎ。私もやったことがある。どつちに首を上げるかは遺伝か。絨毯よりも青畳の上が練習にはいい。海の気分が出る。博物館の網走監獄未草

札幌市 藤林 正則

【評】明治の監獄則で設置され今は博物館。北海道の囚人は厳しい監視下、道路鉄道の工事や鉱山労働に従事。外に出るとスイレンが咲いていた。重厚な内容が優しい花で救われる。風鈴の鳴っているかと問う父よ

堺市 原山 桂子

【評】風鈴の音色は酷暑の中でも鳴っている。耳が悪くなった父には聞こえない。あれは鳴っているかいと作者は聞かれた。異色な風鈴の句。沖繩忌また戦いの準備して

葛城市 二上 三六

取調室の天井扇風機

大阪市 今井 文雄

ででむしの絶滅危惧種とや哀し

つくば市 坪 文雄

義肢と見て鴉動かす夏木立

鎌倉市 中江 優子

駒草や頬擦り寄せる柵の馬

仙台市 齊藤 栄子

手話の尻に友二人で夏夏休み

飯田市 井原 修

夏の日の暮れてそこはか老いるなり

姫路市 菊亭 典夫

## 宇多喜代子 選

午後六時西日まともの夕餉かな

武蔵野市 相坂 康

【評】作者のお宅では、午後六時が夕食の時間と決まっているのだらう。冬であれば真っ暗だが、夏の六時はまだ明るい。そんな夕餉の風景が微笑ましく見えてくる。ステテコでビール飲む父遠くなり

埼玉県 中田やす子

【評】当節では見ることの少なくなった懐かしい父親像である。勤めを終えたお父さんのささやかな喜びの寸景に親しみがわく。お隣りも老の二人や豆の飯

姫路市 戎子 千賀

【評】作者宅も老いの二人お隣りも老いの二人。当節では珍しくない老人の二人暮らしだがそれでも豆飯がいささかな幸せを感じさせてくれる。簾してきのふの遠くありにけり

千葉市 中村 重雄

海の声山の声沸く夏帽子

東京都 高根沢啓子

リヤカーに町の子乗せて麦の秋

霧島市 久野 茂樹

早曉のみち豌豆の雫かな

鈴鹿市 岩口 巳年

身の疎むきのふけふなり髪洗ふ

仙台市 松岡 三男

濁流のうねる点景半夏生

さいたま市 西村 正男

風鈴に幸せさうに風が吹く

福原市 城 恵巳子

## 正木ゆう子 選

子鴉は「あー」と濁って仲間入り

札幌市 田口 和子

【評】濁点「。」が入るのは普通カ・サ・タ・ハの行だけだが、この「あ」にはみな肯くのではないだらうか。音声にこだわった前半から生態にうまく転じた下五が可愛い。しやぼん玉地球も虹の色なすや

福岡市 高山 国光

【評】地球の表面も水に覆われているから、しやぼん玉のように虹色に見えるかも、とは私も思う。何処から、誰が見るのかはわからないが。国生みの島に夕虹あすは晴れ

神戸市 大浜 義弘

【評】古事記の「国生み神話」で、イザナギ・イザナミが最初に生んだ島は淡路島。その島の夕景が見られるとは。しかも虹まで架かっている。夏雲やわが瘦せ腕の力こぶ

伊勢原市 吉田 吉宣

時かけて青大将の去りゆけり

神戸市 藤生不二男

盛り場の午後の素顔へ水を打つ

徳島市 長山 敦彦

偏食もありて長命アロハシャツ

旭市 神成田佳子

いつまでも親は居ないぞ鳥の子

土浦市 今泉 準一

那須岳の煙も収め雲の峰

須賀川市 関根 邦洋

土用干絵本に残る子等の声

茅ヶ崎市 清水 吞舟

## 小澤 實 選

理非正否混沌の世や草茂る

海老名市 山田 山人

【評】地球温暖化ひとつとっても、その理非、正否をどう考えて、どう向き合ったらいいのか。わかりにくい、そんな問題ばかりだ。悩みつても、現代と対している一句。汗滲む警備日誌の署名かな

志木市 谷村 康志

【評】警備日誌は担当者が交代する際に記載し、次の担当に引き継ぐ。その署名に汗が滲んでいるとは、暑く、厳しい労働条件のようだ。もちまきも余興のひとつ海開き

対馬市 神宮 斉之

【評】海開きは海水浴場を始める日である。餅を撒いて景気づけるといのは、ひなびていい。砂浜に撒き、こどもたちが拾うのか。売り尽しATMへ夜店入

名古屋市 可知 豊親

白シャツやフォークをすべるナポリタ

神戸市 西 和代

素謡の声を合はせる夏座敷

東京都 腰山 正久

大嬢隠れて隠れきれざりし

日高市 佐藤 隆夫

応召の兄の無念や広島忌

島根県 重親 映人

青空や重機も土砂も灼けあたり

国分寺市 野々村澄夫

朝採りの胡瓜を揉んで恙無し

行橋市 野田 文字